

# 社会に交わる新しいメディア学習の実践

## — 新しいリテラシーに向け遠隔講義とその未来 —

引地 達也  
(シャローム大学校)

【キーワード】 インクルーシブ教育、福祉型専攻科、メディア・リテラシー、マスコミュニケーション、SNS

### はじめに

社会的ケアが必要な知的及び学習障害者は的確な支援活動がなければ、「健常」との名のもとに「普通」がはびこる世の中であって、その普通についていけないことで情報弱者になる可能性が高まる。最近では知的障害や発達障害のある人もパソコンやスマートフォンを保持し、重要なコミュニケーションツールとして活発なメディア閲覧・利用をしている現状は、社会の情報交換の一部に組み入れられた結果として健常者中心の社会との齟齬などによるトラブル発生につながっている。これら情報交換の中でも特にソーシャルメディアの利用は障害者のコミュニケーション社会を豊かにしたことは間違いないが、各種トラブルは私自身が日々障害者と接する中でも頻繁に報告される事例だ。

特別支援学校に通学する生徒のソーシャルメディアに関するトラブルは、教育現場がメディア環境の変化に合わせた対応及び教育が十分になされていないのが原因の1つと考えられる。これは特別支援学校卒業後にも影響し、正しいメディア利用の確立がされないまま、社会に出ることは各種リスクを伴ってしまうことが考えられる。筆者はメディア領域の研究者でもあり、このメディアを学ぶことは、マスメディアとの付き合い方を基本としてソーシャルメディアの利用の仕方を学ぶことが、効果的なメディア学習であり、現代のメディア・リテラシーの向上につながると考えている。

本稿ではこの問題意識を基本として特別支援学校のメディア教育に関する「特別支援学校のメディア教育の実態調査」で実態を示し、現在福祉事業型専攻科とともに実践している「メディア論講座」の効果を報告し、「これからのメディア教育」について図式化して方向性を示したい。

### 1. 特別支援学校のメディア学習の現状からの考察

筆者は全国の特別支援学校の高等部でのメディア教育の現状を調査・分析した上で、障害による「情報弱者」が現代において弱者にならないための、学校から社会の移行期における適切なメディア教育の必要性を導きたい。本章では特別支援学校教員等へのヒアリング取材を参考にし、「全国の公立の特別支援学校高等部(知的障害者対象)教員へのアンケート調査」<sup>1)</sup>で現状を分析した。

その結果、特別支援学校で「メディア教育」をほとんどが「必要」と感じ、実際に行っているのは約7割だった。その理由の説明について、39件が「問題」「トラブル」「悪口」「不満」「安全」等のネガティブで防御的な意味合いからの必要性から実施する傾向が明らかになっ

た。回答の意見は「SNS等の使用による、コミュニケーションでの問題や、ゲームアプリでの金銭の問題などの問題点が多々あるため」（沖縄県）、「情報の発信・受信に関してトラブルに巻き込まれることが少なくない。よって、メディア教育を行うことで正しい情報発信と受信を学び、メディアによるトラブル回避とメディアを活用することで得られるよりよい生活につながるためにもメディア教育は必要だと考える」（岩手県）等である。共通する認識として、旧来の意味ではなく、新しい意味での「メディア・リテラシー」をイメージした上で教育を構築することが必要であり、安全や犯罪に巻き込まれないという目的はあるとしても、結局は正しい情報を見分ける力を付けることが求められており、その方法を教員は模索しているといえる。この新しいメディア・リテラシーは結局、新聞・テレビ等、発信される情報に対するものでもあり、インターネット情報に対するものでもあり、ソーシャルメディアに対するものでもある、普遍的な意味合いを帯びてくる。

これに対応するのが、福祉事業型専攻科や私が運営している要支援者のための学びの場、シャローム大学校での「メディア教育」である。伝統的なメディア・リテラシー教育を踏まえた上で情報の基本を知り、その上での情報交換を学び、SNS等の実生活での情報リテラシーを向上させていくという道筋である。

ソーシャルメディアが情報ツールとして優勢な中であって、これをコミュニケーション文化の現在地と位置付けた場合、生田らが指摘する「新しい文化は、教育コミュニケーションによって創られていく。教師の役割は重大であり、それゆえ、教師自身が社会の進展と共に成長していかなければならない」<sup>2)</sup> のであると同時に、その教員を社会は支援する施策が必要になる。そのベースとなる特別支援教育におけるきめ細かなニーズに応じたメディア教育に向けて現場の教員と専門家との間で検討を重ねて、最適化を追究していく行動が求められている。その行動の中には当然、ケアの見識を持った教育者がいることが望ましいであろう。

## 2. 遠隔講義での実践

### (1) 前提となるメディア教育

特別支援学校卒業後の青年期の学びの中に「メディア学習」を導入する取組の前段として、私は自らが運営する就労移行支援事業所での「学び」のプログラムで導入し、受講者からはコミュニケーション学習への渴望やメディアに関する知識欲を感じ、障害者にとってのメディア学習の重要性を感じ、見晴台学園大学の客員教授就任と同時に行ったのが、マスコミュニケーションの概論を紹介する「メディア」論であった。この授業は2017年春季に「新聞メディア」「テレビ・ラジオメディア」「インターネットメディア」の3回に分けられ行われた。さらに2017年12月に愛知県で開催された全国専攻科（特別ニーズ教育）研究会で模擬授業として全国の福祉型専攻科の学生向けに講義を行い、講義後も私を取り囲んで昨今の社会情勢の真実の見分け方や自分の考え方が正しいかななどの質問がひっきりなしに寄せられ、メディアへの関心の高さがうかがわれた。シャローム大学校でも2019年春の開学に向けての2018年春からの1年はプレ学習期間として特別支援学校の卒業生3人にも日常的にメディアに関するゼミ形式の学習を行った。これらの講義におけるカリキュラムの効果を検証した後、2019年春からの遠隔講義につながっていく。

## (2) 2019年度のメディア論の遠隔講義

遠隔講義は2019年度4月から始まった。2019年4月に正式に開学したシャローム大学校（埼玉県和光市）と同4月に開学したKINGOカレッジ（新潟市）とNPO法人見晴台学園大学の3校が、インターネットのテレビ会議システム（シスコ社のウェブエクセスを使用）を使って、双方向性の画面を使っての授業である。ホスト役は私が務め、3校がそれぞれ画面で相手の学校と学生の様子を見ながら、メインの画面では引地が作成した資料を示すスタイルで授業を行うものである。

オンラインされた状態での講義時間は50分だが、各校で講義前後に準備時間も設定している。基本的な講義のフローは以下である（【図表1】・【図表2】・【図表3】）。

【図表1】遠隔講義のフロー

順序	項目	内容・備考
1	プロローグ（本日の予定）と出席者の点呼	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本日は何をやるのかを明確に示す</li> <li>・遠くにいても名前と顔が一致する努力</li> </ul>
2	前回の復習	<ul style="list-style-type: none"> <li>・前回の学習内容を画面とともに振り返る</li> <li>・前回の学習で出た質問等にも対応</li> </ul>
3	発表や出題への応答	
4	クイズ（講義テーマに即した内容を出題＝講義の一環）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・それぞれ2チームに分けて解答を考える</li> <li>・解答は紙に書いて提示する</li> </ul>
5	本日のテーマ講義	<ul style="list-style-type: none"> <li>・パワーポイントで図を示しながら講義</li> <li>・要点は完結に文字で提示</li> </ul>
6	クイズ（講義内容に即した内容を出題＝講義の一環）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・それぞれ2つ一むに分けて解答を考える</li> <li>・回答は紙に書いて提示する</li> </ul>

【図表2】2019年度前期・各講義テーマ

	講義テーマ・内容	発表	クイズ
1	オリエンテーション・自己紹介・埼玉、新潟、名古屋について（引地が新潟から講義）	出題：埼玉県と名古屋市にあって新潟市にないものは何でしょう？	世界で最も生産量の果物は何か他
2	3か所のゆるキャラ・コミュニケーションとは何か	発表：前回の出題への答え	牛井チェーンに関する出題
3	コミュニケーション1	発表：各地域からのクイズ 発表・出題等	
4	コミュニケーション2	気になるものの紹介	各地域からのクイズ
5	コミュニケーション3 （引地が名古屋から講義）	気になるものの紹介	名古屋地下鉄や埼玉県の木について
6	色のコミュニケーション	出題：だんごの味 発表：気になるシリーズ	五輪マーク
7	色のコミュニケーション	出題：ほかの学校に「教え	戦隊ヒーロー、新幹線

		て！」を考える 発表：だんごの味	
8	色のコミュニケーション（食と色、世界の料理）	出題：この言葉を何という？ 審査：見晴台学園フォトコンテスト	待ち合わせ場所と忠犬ハチ公
9	ポスターによるコミュニケーション	すがきやラーメンについて（見晴台）等	警察のポスター等
10	グルメに関する地域おこし	各地のグルメ紹介	ご当地グルメについて
11	地域ブランドとマーケティング	みんなの通学路	カップ焼きそば
12	マーケティングと商店	・お弁当コンテスト（KINGO カレッジ） ・みんなの通学路	セブンイレブンについて
13	ジャニーズのマーケティング	マイブーム紹介	嵐のCMについて
14	全体のおさらい・クイズ総集編	マイブーム紹介	実在しないラーメン等
15	学校行事のため休講		

【図表3】2019年度後期・各講義テーマ

	講義テーマ・内容	発表	クイズ
1	オリエンテーション	夏休みの思い出	日本最初のクイズ番組
2	アニメの歴史1	好きなアニメ紹介	日本発の巨大ロボット
3	アニメの歴史2	好きなアニメ紹介	元祖少女アニメ
4	アニメの歴史3	好きなアニメ紹介	元祖大人向けアニメ
5	アニメの歴史4	好きなアニメ紹介	3番目の長寿アニメ
6	ドラマのなりたち1	好きなドラマ紹介 アニメの吹き替え挑戦	日本ドラマランキング
7	ドラマのなりたち2	好きなドラマ紹介	アメリカのドラマ
8	ホームドラマ1	好きな俳優紹介	渡る世間は鬼ばかり
9	ホームドラマ2	好きな俳優紹介	ひとつ屋根の下
10	時代劇ドラマ	年末年始の風景	時代劇の長寿番組
11	刑事ドラマ	年末年始の風景	西部警察の車両
12	学園ドラマ	年末年始の風景	実在の学校はどこか
13	恋愛ドラマ	年末年始の風景	スケバン刑事
14	ドラマを総括・整理する	年末年始の風景	ドラマ視聴率
15	クイズ選手権・最終決戦		

講義の感想やレポートで寄せられた学生の声は以下であった。

「ほかの人とはなしができたからよかった」「クイズに時間がとられて内容が薄くなっていた」「むずかしい勉強でしたが、とてもいい経験でした。グルメを見ておいしそうでした。学生の通学は今までは分かりませんでした、聞けてよかったです」「いろんところの地元グルメが見れておもしろかったです」「店の問題や、製品を出している所が楽しかったです」「赤と黄色とゴールドとシルバーの色の意味が分かることができよかったです」。

### 3. 今後のメディア教育に向けて

#### (1) 障害者の生涯学習の視点から

2018年度から始まった文部科学省事業の「障害者の多様な学習活動を総合的に支援するための実践研究」の中でシャローム大学校は障害者向けのオープンキャンパスを開催し、学習テーマを「メディアと社会～知る、観る、使う～」<sup>3)</sup>とした。午前と午後のプログラムでマスメディアの基本知識と映像メディアの変遷を学び、メディアの歴史変遷図をグループで話し合いながら完成させるのが「学習フェーズ」で、午後は自分が「メディアになる」ことを意識してもらい、プロのコーラスグループの歌手を講師に、音を意識しながら実際に声に出すことで伝わり方が違うことを学習した。障害者向けに、メディアに親しんでもらうことも重要なポイントであったが、アンケート調査から浮かび上がったコミュニケーションツールとしてのメディアの変化に対応した学習を確立するには、まだ研究の途上である。

新しいメディア教育の構築に向けては、「障害者」の括りでのメディア・リテラシー向上への先導役がないのが現状であり、文部科学省が2018年度から開始した障害者の生涯教育の充実に向けた政策にメディア教育を連動させるには、メディア側の理解と関心が必要であるとともに、受け手側もかつて活発だった地域の青年学級の役割を見直しながら、地域での障害者の学びのコミュニティにおいて新しいメディア教育の展開を模索する必要があるだろう。

#### (2) ソーシャルメディア時代への対応

ソーシャルメディア時代に適合させたメディア・リテラシーの構成要素を中橋は「ソーシャルメディア時代のメディア・リテラシーの構成要素」<sup>4)</sup>として以下7つにまとめている。

「1メディアを使いこなす能力」「2メディアの特性を理解する能力」「3メディアを読解、解釈、鑑賞する能力」「4メディアを批判的に捉える能力」「5考えをメディアで表現する能力」「6メディアによる対話とコミュニケーション能力」「7メディアのあり方を提案する能力」である。

多岐に渡る項目でメディアによる情報を受けるだけではなく(2)特性を理解する(4)批判的に捉える(5)考えをメディアで表現する(6)対話とコミュニケーション能力(7)メディアのあり方を提案する、は特に自分がメディアを使いこなすため、及び使いこなす前提となる在り方を考えられることを求めている。特別支援教育の中で上記7項目を伝えるためには、プロフェッショナルの手も借りなければならぬかもしれない。

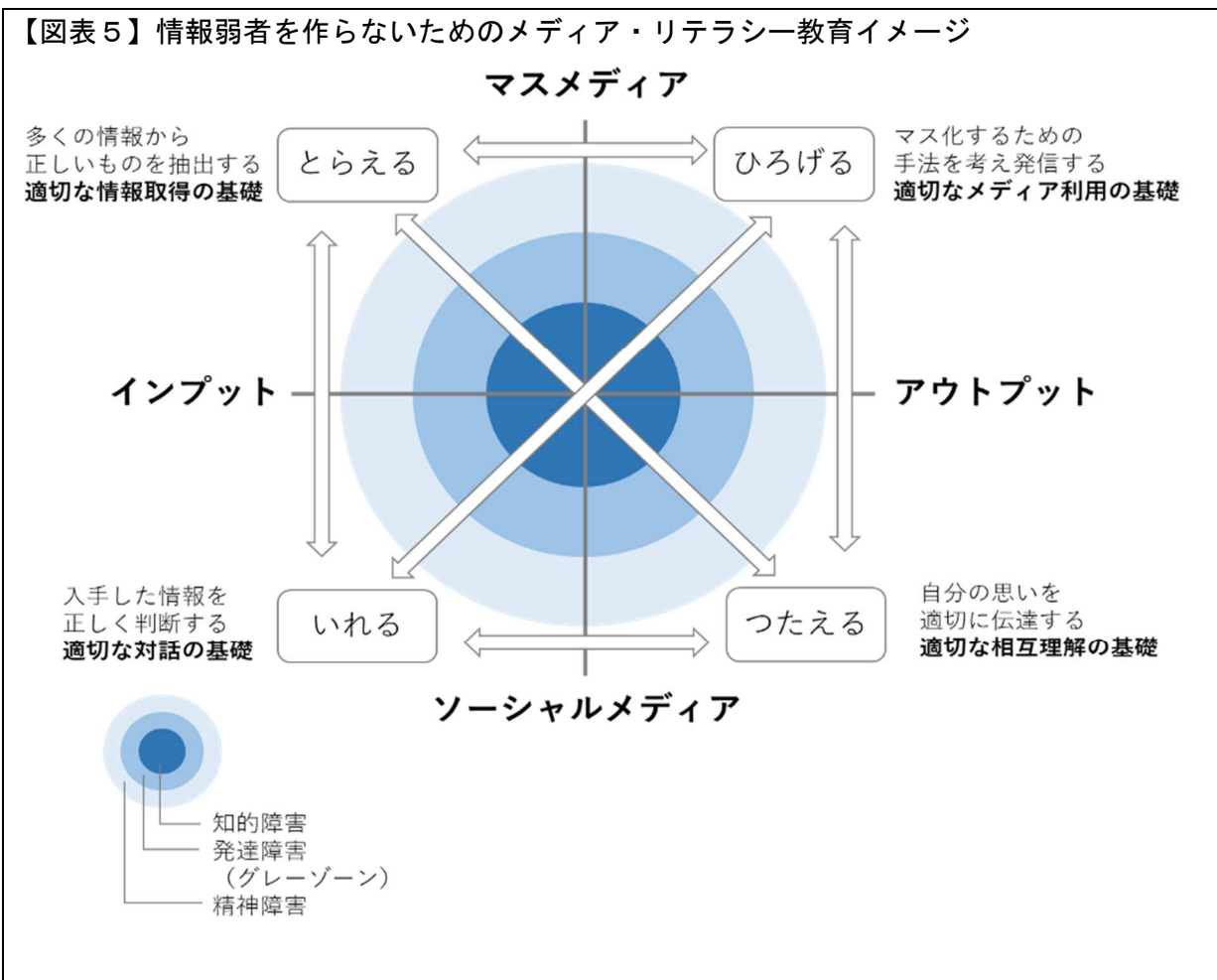
ソーシャルメディアを研究する Bossio は現在も混沌としているソーシャルメディア状況を以下のように表現しているが、この混沌の中で教育をどう成り立たせていくかが問われていることも念頭に置きたい。

「ソーシャルメディアは、コミュニケーションの新しい文化の創造を通じてジャーナリズム

ムの構成の変化に貢献しており、その中で参加者の役割と関与のルールについてはいまだに交渉されている状態にある。個人的な意見と経験に基づき、感情的なコンテンツを優先し、最後に、関心のある問題やイベントに関与するアドホック（特別な）な公共の構築におけるユーザーの中心性を備えたコミュニケーションのソーシャルメディア文化は、公共空間とは非常に異なる文化、政治や市民参加のルールとのコミュニケーションを創造するのである」<sup>5)</sup>

ここにはソーシャルメディア時代のジャーナリズムの可能性も言及されている。メディア・リテラシーの構築を考えた場合、具体的にソーシャルメディアとジャーナリズムの接点としてメディア・リテラシーを構築できないだろうか。

この希望を持ちながら、ソーシャルメディア時代のメディア・リテラシー教育を基盤に知的障害や発達障害者、精神障害者が情報弱者とならないための教育の概念図として考えたのが【図表5】「情報弱者を作らないためのメディア・リテラシー教育イメージ」である。



マトリックスの縦軸を「メディア」とし、上方向がマスメディアへの理解の深度、下方向がソーシャルメディアへの理解の深度を示し、横軸の右方向がアウトプットの発信度、左方向がインプットの内包度とした。各領域を、メディア情報を「ひろげる」「つたえる」「いれる」「とらえる」に分けて考え、向上するための「基礎」の領域も示した。さらにすべての領

域は相互関係性で成り立っていることも矢印で明記したが、各領域が分断した状態のままでは、知識や行動が限定的になる可能性への注意喚起でもある。マトリックス背後の円の領域は、教育対象を示しており小さな円から3つの障害を意味する。メディアやアウトプット・インプットの理解度により教育内容を変化させる必要性を強調しているもので、対象を明確化しなければ教育的効果は得られない。特に各個人差を考慮し慎重に対象の特性を見極めたうえで実施する必要がある。

## さいごに

今後の実践は、マトリックス上の目的を明確にした上で対象に合わせたバリエーションの豊富さを確保することで情報弱者の可能性のある人へのメディア・リテラシー教育は開かれていくと信じていたい。マスメディアとソーシャルメディアの領域が混在する中で、教育する側が上記のマトリックスを参考にし、その領域と教育目的を整理することを提起しつつもまだ開拓中の作業でもある。実践を積み重ね、必要な対話や協議を重ねて構造化を目指したい。

---

### 参考文献等

- 1) 調査は2018年6-7月年に全国の県立・市立の特別支援学校高等部（知的障がい）850校に郵送で行い、回答は150校だった。
- 2) 生田孝至・丸山祐輔「教師のメディア・リテラシー育成に関する研究動向と課題」『新潟大学教育人間科学部紀要第9巻第1号』（新潟大学教育人間科学部、2006年、p.33。
- 3) 一般財団法人福祉教育支援協会『2018年度文部科学省委託研究事業 特別支援学校高等部卒業生等を中心に対象とした若者の学びを展開するための学習プログラムの開発事業最終報告書』一般財団法人福祉教育支援協会、2019年。
- 4) 中橋雄『メディア・リテラシー論—ソーシャルメディア時代のメディア教育』北樹出版、2014年、p.48。
- 5) Bossio, Diana *Journalism and social media* Palgrave macmillan, 2017, p.159